

## J. D. Salinger の作品における黒人とユダヤ人の関係

### －短編 “Blue Melody” と “The Varioni Brothers” －

尾 田 知 子

#### 1. はじめに

ベストセラー小説 *The Catcher in the Rye* (1951) で有名な小説家 J. D. Salinger (1919-2010) は、アメリカ現代文学史における主要な作家の一人である。2019 年 1 月に生誕百周年を迎える彼の文学作品は、再評価の気運がますます高まっている。

主としてニューヨークを舞台に展開する Salinger の文学作品のなかで、ジャズピアニストやメイドとして登場する黒人キャラクターは、雇い主である白人キャラクターによって、差別的言動をとられていることが多い。<sup>1)</sup> このように典型的な描かれ方をしているため、先行研究において、黒人表象の議論はこれまで等閑に付されてきた。例えば、田中啓史は「サリンジャーは人種問題に疎い」と切り捨て(田中 246)、新田玲子は、人種という社会問題が登場人物の個人的な次元に押し込められている点に対し、批判の目を向けている(新田 434)。アメリカをはじめとする海外の批評家の多くは、Salinger による黒人表象を議論の対象に選ぶことさえ怠ってきた。

作者 Salinger 自身、移民を祖先に持つ家に生まれた「エスニック・マイノリティ」である。David Shields and Shane Salerno の著作である伝記 *Salinger* (2013) によれば、ユダヤ人の父とアイルランド人の母から受け継ぐ “part-Jewish, part-Irish” (半分ユダヤ系, 半分アイルランド系)<sup>2)</sup> の血統により、Salinger は幼少期より差別を受けてきた。アメリカ社会の中心から疎外され、辛酸を舐めてきたのである (Shields and Salerno 34, 37, 55)。こうした Salinger の「周縁的」な生い立ちは、彼の作家人生における根源的な問題の一つを示しているように思われる。したがって、アメリカの文化・社会の中心に位置する WASP (White Anglo-Saxon Protestant) に対し、同様に「周縁化」されてきた対象である黒人が、ユダヤ系作家である Salinger によっていかに表象されているかを検討することは意義深い。<sup>3)</sup>

本稿では、単行本未収録短編 “Blue Melody” (*Cosmopolitan*, 1948)<sup>4)</sup> における黒人表象の意義を検討し、ユダヤ系作家 Salinger によって、WASP 中心社会で同様に「周縁化」された黒人の葛藤に光が当てられていることを指摘する。具体的には、同じく単行本未収録の短編 “The Varioni Brothers” (*Saturday Evening Post*, 1943) の主要人物である Varioni 兄弟<sup>5)</sup> の一人、Sonny Varioni が、作者 Salinger の分身としての役割を担っていることを指摘する。この点を踏まえて “Blue Melody” を再読し、黒人女性歌手が Varioni 兄弟から楽曲提供を受け一躍有名になるエピソードに着眼することで、黒人とユダヤ人が手を携えてアメリカ社会を生き抜こうとする構図を Salinger が意識的に描いていることを主張する。以上の考察により、「人種問題に疎い」という批評の一方で、人種的マイノリティの葛藤の描写に正面から挑む Salinger 作品にスポットライトを当てるとともに、その重要性を論じたい。

## 2. 異郷としての南部とステレオタイプ化された黒人

黒人ピアニストとその姪であるジャズ・シンガーによって経験される黒人差別に焦点を当てて書かれた短編“Blue Melody”は、奴隷制が敷かれていた過去を持ち、現代においてもその爪痕が残るアメリカ社会で「周縁化」されてきた黒人の姿を描き出す。短編の語り手である兵士は、1944年、真冬のドイツで、歩兵の交代要員として戦線に送られる途中である。すし詰めの軍用トラックに夜の帳が下り、皆が寝静まった中、語り手はRudfordというテネシー州出身の青年から、幼い日の思い出話を聞く。Rudford少年は、クラスメイトのPeggyと共に、Black Charlesと呼ばれる黒人ピアニストの店に通い、親睦を深めていた。ある日、Black Charlesは、姪でジャズ・シンガーのLida Louiseを紹介する。その類い稀なる歌声で、Lida Louiseはたちまち人気者となり、著名な音楽家であるVarioni兄弟から楽曲の提供を受け、レコードも立て続けにリリースされた。そうした中でも、彼女はRudfordとPeggyに対し、変わらぬ友情を示していた。ある日、Lida Louiseは突如激しい腹痛を訴える。Rudfordらの必死の訴えもむなしく、黒人であるという理由で診療拒否にあい、病院をたらい回しにされたLida Louiseは絶命する。十五年後、大人になったRudfordは、夫を連れてPeggyと再会する。Peggyは、Lida Louiseの“Soupy Peggy”（泣き虫ペギー）というタイトルのレコードを今も持っているかと、Rudfordに尋ねる。持っていると答えたRudfordに対し、Peggyはその曲を聞きたいので電話してほしいと懇願するが、会話の途中で夫に連れ出される。Rudfordがその後Peggyに連絡することはなかった。

Rudfordの友人で、大人の黒人ピアニストであるBlack Charlesは、不衛生と風紀の乱れで名高いストリートの古びたカフェでピアノを弾いている。RudfordとPeggyの到着時には大抵寝ており、二人はBlack Charlesを殴って起こす。腎臓を狙ったり、より強い衝撃を加えるための拳の握り方をしたりと、Black Charlesを起こそうとする二人の行動は暴力的な表現で示されている。つまりここでは、白人と思しき人物が黒人に対して暴力を行使するという図式が成立している。それにも関わらず、Black Charlesは嫌がる素振りを見せることなく、友人であるRudfordとPeggyに友好的に接する。そのようなBlack Charlesの様子を説明する際に使用されているのは、次のような黒人に対するステレオタイプの表現である。

Black Charles slept, fully dressed except for his shoes, on a bumpy, ratty looking settee, a few stacked tables away from his beloved piano.

Peggy circled the problem academically.

“Well, go ahead and *do it*,” Rudford said.

“I’m fixin’ to; I’m fixin’ to. Go away.”

Rudford watched her a trifle smugly. “Naa. You can’t just shove him around and get anywhere. You’ve seen me,” he said. “You gotta really haul off. Get him right under the kidneys. You’ve seen me.”

“Here?” said Peggy. She had her finger on the little island of nerves set off by the dorsal fork of Charles’s lavender suspenders.

“Go ahead.”

Peggy wound up and delivered.

Black Charles stirred slightly, but slept on without even seriously changing his position.

“You missed. You gotta hit him harder than that anyway.”

The aspirant tried to make a more formidable weapon of her right hand. She sandwiched her thumb between

her first and second fingers, held it away from her and looked at it admiringly.

“You'll break your thumb that way. Get your thumb out of-”

“Oh, be quiet,” said Peggy, and let go with a haymaker.

It worked. Black Charles let out an awful yell, and went all of two feet up in the stale, café air. [...]

Charles scratched his head, swung his immense, stockinged feet to the cigarette-butt-specked floor, and squinted. “That you, Margar-reet?”

(“Blue Melody” 112-113, 下線筆者)

F. Scott Fitzgerald (1896-1940) の作品 *The Great Gatsby* (1925) を「黒人の不在」という観点から分析している批評家 Lois Tyson も、黒人キャラクターのステレオタイプとして、“foolish, childish, overtly dramatic, comic characters” (愚かで、子どもっぽく、あからさまに仰々しく、滑稽な人物) という特徴を指摘している (Tyson 405)。同様に、“a gentle giant” (心優しい巨人, “Blue Melody” 113) と形容されている Black Charles は、愚鈍で人が良く従順であり、子どもと同じ目線に立ち、泥のように眠っている最中に殴られており、彼が飛び起きる動作は仰々しく描かれている。そして、寝ぼけているのか女性用トイレの方向に進む (113)。このように、Black Charles は既存のステレオタイプの黒人として描かれている。

また、本短編には、綿花栽培を中心とした農業地域で、多くの黒人奴隷が酷使されていたアメリカ南部と、早くから奴隷制が撤廃され産業の発展にも恵まれた北部の間の文化・社会的優劣が繰り返して描かれている。例えば、Rudford の父親はボストン出身の実業家で、テネシーに移り住むと出版社を買い取り、ハイスクール向けの教科書売り出して、その内容を幼い息子に暗記させていた。このように、Rudford の少年時代は、父親による英才教育の日々であった。このエピソードは、Rudford がテネシー州、つまりアメリカ深南部生まれでありながら、北部の都市であるボストンの出身者の血を引き、学術知識を豊富に備えた人物であることを示すために織り込まれていると考えられる。さらに、同乗者によって語られた過去の思い出が聞き手によって語り直されるという本短編の物語構造は、WASP であると思われる Rudford 少年のアメリカ南部での経験を、現在から遠いものとして印象付けている。つまり、アメリカ南部を北部から「遠い」存在、すなわち見知らぬ土地、あるいは異郷として描き出す役割を果たしている。また、Rudford にとっての南部は、Peggy との淡い恋を経験し、Lida Louise の死という悲しみを彼女と共有した、特別な場所である。したがって、アメリカ南部に対する憧憬が本作品からにじみ出ていることも指摘できる。

南北戦争での敗北以来、北部人の目を通して見られ、分析され、語られてきたアメリカ南部は、北部に対して従属的な位置に甘んじていた (井出 4)。そうした流れから、長年北部人によって「アメリカの恥」と非難され、スケープゴート化されてきた (49) アメリカ南部は、アメリカ合衆国内において、文化・社会的劣位に置かれてきたと言える (30)。同時に、“almost always rural” (ほとんどいつも田舎, Hobson and Ladd 1) といった固定観念に縛られ、Southern belle (南部美人) や Southern hospitality (南部の温かいもてなし) といったステレオタイプも構築されるなど (井出 15)、南部は北部人にとっての幻想の対象であった。作品の執筆年代を考慮に入れると、アメリカ北部で生まれ育った Salinger の短編 “Blue Melody” における南部および黒人の描写に、こうした人種差別的価値観が露呈していることは否定できない。批評家 David Yaffe も指摘するように、Salinger は南部に “otherness” (他者性) を感じ取り、それに惹かれていたと言える (Shields and Salerno 213)。

他方で、Salinger は黒人差別を問題視する姿勢も見せている。“Blue Melody” の語り手の兵士による次の記述がその最たる例である。

[. . .] So Please don't anybody write in for additional information [. . .]. This request applies particularly to readers who may sooner or later think that this story is a slam against one section of this country.

It isn't a slam against anybody or anything. It's just a simple little story of Mom's apple pie, ice-cold beer, the Brooklyn Dodgers, and the Lux Theater of the Air-the things we fought for, in short. You can't miss it, really.

(“Blue Melody” 51, 112)

本作品に込められた黒人差別に対する抗議のメッセージを、語り手の兵士をもって否定させているように見せながらも、“a slam against one section of this country”（わが国のある地域に対する酷評）という言い回しや、“You can't miss it, really”（見過ごせないことだ、実際）という言葉からは、アメリカ南部における黒人歌手の死に込められたメッセージを風化させるべきではないという、作者 Salinger の実際の意図が表れていると言える。さらに、そうした黒人差別批判は、作者自身のユダヤ系という「周縁的」なエスニシティに起因していると思われる。この点について、次章から詳しく論じる。

### 3. ユダヤ系アメリカ人としての Varioni Brothers

短編“Blue Melody”に登場する黒人女性歌手 Lida Louise の死（1942）は、「ブルースの女帝」と謳われ、1920 から 30 年代にかけての音楽界を席卷した歌手 Bessie Smith の死からインスピレーションを受けている（Slawenski 165; 田中 35）。1937 年、不運にも自動車事故に遭い、病院をたらい回しにされ、ようやく搬送を許された病院で間もなく息を引き取ったという逸話<sup>6)</sup>は、Lida Louise の盲腸炎による死にほとんどそのまま反映されている。

このように、実在したジャズ・シンガーをモデルにした人物を創造し、作品に登場させるという手法からは、Salinger のジャズへの造詣の深さと彼の大衆音楽界に対する熱狂が見出せる（Shane and Salerno 193-94）。さらに、ジャズへの傾倒が高じて、その主たる担い手である黒人と、彼らが直面する人種差別へと目が向くようになったことも推察される。Lida Louise に曲を提供したミュージシャンの兄弟を主要な登場人物に据えた短編“The Varioni Brothers”は、Salinger のこうした傾向を顕著に示している。

“The Varioni Brothers”の概略は以下の通りである。とある新聞の客員コラムニスト Mr. Vincent Westmoreland は、1920 年代、全盛期の Varioni Brothers が残した音楽を懐かしみ、Joe Varioni が誤って射殺された後、行方をくらました Sonny Varioni の消息を問う。その問いに答える形で、かつて大学で教鞭をとっていた Joe の元学生である Sarah Daley Smith という一般女性からの投書によって、Sonny Varioni の現在の姿が語られる。Sarah は、英文学を教える傍ら小説を執筆する Joe を厚く信奉する熱心な学生であった。彼女は、Joe と Sonny が作詞・作曲家としてスターダムにのし上がる中、創作より Sonny の楽曲のための詩作を優先する Joe の状況を嘆く。Joe を自由にしてほしいという Sarah の訴えもむなしく、Sonny は Joe を専属の作詞家として登用し続ける。ある日、賭博で恨みを買っていた Sonny と間違っ て Joe が射殺され、Sonny は逃亡し行方をくらます。そして現在、Sarah は Sonny と再会し、Joe が大量の紙切れに書き残した文章を紡ぎ合わせ、小説を完成させようとしていることを知る。

作曲家の Sonny Varioni に着目すると、作者 Salinger の像が投影されていることが分かる。物語終盤、近況を尋ねる Sarah に対し、Sonny は次のように応答する。

Sonny was a long time making answer. Finally he said, “I have Joe's trunk with his script in it. I've read it. Most of it's written on the inside of a match folder.”

[. . .]

“I know what you mean,” I[Sarah] said. “He didn't care what he wrote on.”

“I'd like to put his book together. Kind of type it up. I'd like to have a place to stay while I do it.” [. . .]

(“The Varioni Brothers” 77)

作詞家だった Joe が自らと間違えられて殺害された後、残された Sonny は、生前の Joe によって紙切れやマッチ入れなどに書かれた短い文章をつなぎあわせる作業に従事していると答える。

「日用品に断片的に描かれた文章」というモチーフは、Glass family saga と呼ばれる Salinger 後期作品群<sup>7)</sup>における主要登場人物 Seymour Glass によって書き残されたものを彷彿とさせる。中編“Seymour: An Introduction” (1959) では、Seymour が自殺直前にデスクプロッターに俳句を書き残していたというエピソードが紹介される (*Raise High* 85)。別の中編“Zooney” (1957) においては、洋の東西を問わず様々な文学作品・思想書から引用された文章が、Seymour とすぐ下の弟である Buddy Glass によって自室の柱にびっしりと書きつけられている (*Franny and Zooney* 131-33)。Buddy は、兄 Seymour 亡き後、彼についての回顧録を執筆している。先述の“Seymour: An Introduction”や“Zooney”は、そうした回顧録の一部という設定である。Buddy が少年時代、兄 Seymour によって紙片に書き留められた詩を探すため、兄のジャケットやジャンパーのポケットを探っていたことも明かされている (*Raise High* 78)。以上の点で Buddy は、Joe の遺志を継ぐかのように文筆活動に勤しむ Sonny の姿と響き合う。批評家 Warren French や田中啓史も述べるように、Joe と Sonny の兄弟関係は、Salinger 作品における最重要人物である Seymour とその弟 Buddy の関係と重なり合うのである (French 57-58; 田中 114-15)。

また、伝記作家の Kenneth Slawenski も主張するように、Sonny という名前は Salinger の幼い頃の呼び名と同じである (Slawenski 51)。そして、先述の Buddy が Salinger の alter ego (分身) であることは、Salinger 研究における通説<sup>8)</sup>である (e.g. Bryan 226; 高橋 220; 新田 376)。以上のように、Sonny と Buddy, Salinger と Sonny, Salinger と Buddy の類似を考慮すると、Sonny Varioni が作者 Salinger の分身の役割を果たしていることは十分に考えられるのである。

以上の考察を踏まえて、次章からは、短編“Blue Melody”に再登場する Varioni 兄弟の役割に着目する。作者 Salinger の分身の役割を付与された Sonny Varioni とその兄弟である Joe Varioni によって、黒人キャラクターとの関わりがどのように持たれているかを分析する。そうすることで、ユダヤ系アメリカ人と黒人が手を取り合い、音楽界での成功を通してアメリカ文化の「中心」へと歩を進めることで、自らの「周縁性」を克服しようとしている瞬間を Salinger が作り出していることを主張したい。

#### 4. アメリカ主流社会における黒人とユダヤ人の関係

次の引用にあるように、短編“Blue Melody”には、“The Varioni Brothers”の主人公で作詞・作曲家の Joe and Sonny Varioni が「カメオ出演」よろしく登場し、黒人女性歌手に曲を提供する。

One Saturday night a big sedan from Chicago, pulled up in front of Meadows's. Among those who piled out of it were Joe and Sonny Varioni. They didn't go back with the others, the next morning. They stayed at the Peabody for two nights, writing a song. Before they went back to Chicago they gave Lida Louise “Soupy Peggy.” It was about a sentimental little girl who falls in love with a little boy standing at the blackboard in school.

(“Blue Melody” 116)

彼らが創作した“Soupy Peggy”（泣き虫ペギー）という曲は、大人になった主人公が心に秘め懐かしむ幼き日の恋愛を象徴しており、本短編において重要な役割を担っている。

Joe と Sonny のファミリー・ネームである Varioni は、イタリア系のエスニシティを連想させるものである。しかし、1920年代に隆盛を極めた作詞・作曲家という設定はむしろ、作詞家 Ira Gershwin と作曲家 George Gershwin の兄弟を思わせる（田中 114）。<sup>9)</sup> 彼らは *Rhapsody in Blue* (1924) 等の名曲の創作を通して、アメリカポピュラー音楽およびクラシック音楽の領域でアメリカ音楽の礎を築いた Gershwin 兄弟として世界的に知られる。一方、彼らの本名は、Israel and Jacob Gershowitz であり、ロシア系ユダヤ人の移民の息子である。<sup>10)</sup> 二つの短編作品における Varioni 兄弟の登場からは、音楽界における Gershwin 兄弟の目ざましい活躍を、同じユダヤ系アメリカ人である Salinger が強く意識し、刺激を受けていたことが推察できる。

Ronald Schleifer が著書 *Modernism and Popular Music* (2011) で言及するように、ユダヤ系の Gershwin 兄弟は、人種差別的風潮にもかかわらず、黒人によるジャズ音楽をいち早く商業音楽界に取り入れたことで名高い。そうすることで、アメリカの“absolute center”（完全なる中心、81）に自らを位置づけ、社会的成功を収めたと、Schleifer は主張する。

They[Gershwin brothers] worked at the heart of commercial popular music in the United States in the early twentieth century, New York City, and, in the face of the racism of American society, they were the first to introduce elements of African American jazz to commercial music in the United States.

(Schleifer 81)

ユダヤ系という「周縁的」なエスニシティを付与され、社会の辺境で生きてきた Gershwin 兄弟は、音楽分野での成功によってアメリカ文化の「中心」で居場所を確保するだけでなく、同様に「周縁化」されていた黒人の音楽を取り込むことで、黒人の存在とその文化を世に知らしめたのである。以上の点を考慮すれば、二短編における Varioni 兄弟の活躍からは、Salinger によるアメリカ中心文化への憧憬はもとより、Varioni 兄弟のモデルとなった Gershwin 兄弟への尊敬の念が見て取れる。さらに Salinger は、黒人のジャズ音楽を取り入れるという Gershwin 兄弟の創作上の手法からもインスピレーションを受けたと見られ、その結果創造されたキャラクターが Varioni 兄弟ということである。

したがって、Joe and Sonny Varioni が再登場する短編“Blue Melody”は、作者 Salinger の分身として創造された Sonny Varioni が Joe Varioni と共に創作した楽曲で黒人女性歌手を成功へと導く構図を描くことで、あたかも Gershwin 兄弟によって黒人音楽がアメリカ文化に取り入れられたのを模倣するかのよう、黒人の存在に光を当てようとしていると考えられる。アメリカ社会の人種的マイノリティとして「周縁化」されてきた黒人に対し、ユダヤ系作家 Salinger から共感と憐憫の目が向けられているのである。

## 5. おわりに

どういふわけか、ユダヤ系アメリカ文学に関する国内外の研究書やアンソロジーに Salinger の作品が掲載されることは皆無である。たとえ作家名が言及されていたとしても、ユダヤ系というエスニシティには触れられていない (e.g. Marovitz xxviii) か、ユダヤ系文学の特徴が弱いと切り捨てられているかのどちらかである (e.g. 邦高 76)。このように、ユダヤ系作家でありながら、自身のエスニシティと作品の「ユダヤ色」を指摘されてこなかった Salinger だが、先述の伝記作家 Kenneth Slawenski は、“Blue Melody”において、“he brought the Holocaust home” (彼はホロコーストを自国に持ち込んだ) と結論づけている (Slawenski 165)。つまり、Salinger は第二次世界大戦時、従軍先のドイツで目にしたユダヤ人大量虐殺 (ホロコースト) を契機に、祖国アメリカにおける黒人の不遇に対しても問題意識を抱くようになったのである。“Blue Melody”における黒人表象はその顕著な例と言えるだろう。アメリカ北部出身者ゆえの人種ステレオタイプの描写に終始せず、黒人の劣位を問題化しようとする姿勢が見られる。WASP こそが「純正」なアメリカ人であるという観念が依然として残る社会において、ユダヤ系アメリカ作家 Salinger の目には、自らと同様に「周縁化」された存在としての黒人が映っていたのである。

Salinger 自身の「エスニック・マイノリティ性」が投影されていることから、彼の作品における黒人表象は自伝的な側面に端を発している。ゆえに、Salinger によって描かれる黒人は、ユダヤ系アメリカ人と手を取り合い、WASP 中心主義的アメリカ社会の「周縁」から声を発しているのである。

## 注

※本稿は、2017年度神戸英米学会年次大会（2018年3月9日、神戸大学大学院人文学研究科）での口頭発表原稿「J. D. Salingerの短編小説における黒人表象」に加筆・修正を行ったものである。なお、本稿における英語のキーワードの日本語訳はすべて筆者による。引用部分のイタリック体はすべて作品の著者による。

- 1) 例えば、*The Catcher in the Rye* (1951)において、主人公 Holden Caulfield の妹 Phoebe は、「(黒人の) メイドの息がかかったラムチョップは食べられない」という主旨の発言をしている。以下に引用する。“The lamb chop was all right, but Charlene always *breathes* on me whenever she puts something down. She breathes all over the food and everything. She *breathes* on everything.” (*The Catcher in the Rye* 160)
- 2) この表現は、Salinger 同様にユダヤ系アメリカ人として創造された主要キャラクターである Seymour Glass とその弟妹のエスニシティを形容する言葉として、中編“Seymour: An Introduction”に登場する (*Raise High* 73)。ユダヤ系同様、アイルランド系の民族もまた、アメリカにおける「周縁性」に苦しんだ過去を持つ。19世紀後半に移住したアイルランド人は、移民先住権が不文律として存在していた新世界アメリカで、先住者による差別に遭い、黒人よりも劣位に置かれていたと、関口功は指摘する (関口 19-20)。
- 3) *The Catcher in the Rye* においても、主人公 Holden Caulfield の発言のなかに、黒人歌手を持ち上げると同時に白人歌手を貶す内容のものがある。その一例を以下に引用する。“It was a very old, terrific record that this colored girl singer, Estelle Fletcher, made about twenty years ago. She sings it very Dixieland and whorehouse, and it doesn't sound at all mushy. If a white girl was singing it, she'd make it sound *cute* as hell, but old Estelle Fletcher knew what the hell she was doing, and it was one of the best records I ever heard.” (*The Catcher in the Rye* 104) こうした中心文化批判は Salinger 研究における主流であるが、そこに黒人がいかなる役割を果たしているかは、十分に議論されているとは言い難い。
- 4) Salinger は当初、この作品に“Needle on a Scratchy Phonograph Record” (ガリガリいうレコードの針) というタイトルをつけていた (Slawenski 163)。しかし、挿絵のすき間にタイトルを収めることを優先させた編集者によって“Blue Melody”に変更された (Shane and Salerno 213-14)。
- 5) 鈴木武樹による“The Varioni Brothers”の日本語訳「ヴァリオニー兄弟」では、Sonny を兄、Joe を弟として区別している (7-28) が、原文テキストではどちらが年長であるか明確でない。田中啓史も述べるように、年少者が年長者に尽くすという日本の伝統的な考え方を、Sonny の成功のために小説家の夢を犠牲にする Joe という構図に当てはめた結果、上記のように訳し分けられたと考える (田中 113)。本稿では、原文テキストに従い、Joe と Sonny の年齢の上下を明らかにせず、「兄弟の一人」などの表現を使用する。
- 6) 批評家 David Yaffe は、この逸話を事実でないと主張している (Shields and Salerno 213)。
- 7) Glass family saga と呼ばれているのは以下の八作品である。“A Perfect Day for Bananafish” (1948), “Uncle Wiggily in Connecticut” (1948), “Down at the Dinghy” (1949), “Franny” (1955), “Raise High the Roof Beam, Carpenters” (1955), “Zooney” (1957), “Seymour: An Introduction” (1959), “Hapworth 16, 1924” (1965)。いずれの作品でも、Glass 家の七人兄妹 (年齢順に Seymour, Buddy, Boo Boo, Waker, Walt, Zooney, Franny) のうち一人以上が中心的な役割を果たす。とりわけ、短編“A Perfect Day for Bananafish”の結末部におけるピストル自殺で有名な長兄の Seymour の家族内における影響力は絶大で、Glass family saga の各作品中で死後も繰り返し偉業が語り継がれていく。次兄の Buddy は大学教授兼作家という設定で、自らの著作の執筆を通して Seymour の偉業を語る役割を主に担う。上記八作品の Glass family saga は Buddy が執筆したという設定となっていることから、Buddy は Salinger の alter ego (分身) であると見なされており、Salinger 研究における通説である。Salinger 自身もそれを認めている。上記八作品のうち“Franny”と“Zooney”を所収して単行本化した *Franny and Zooney* (1961) の初版のブックカバーには、Buddy を“my alter-ego and collaborator” (わが分身にして共同制作者) であるとする Salinger のコメントが記されている。なお、Glass 家の七人兄妹がユダヤ系の父親とアイルランド系の母親を持つという設定は、作者 Salinger の伝記的事実をそのまま反映したものである。この人物設定には、自らの「周縁的」なエスニシティに対する Salinger の強いコンプレック



スが表れていると同時に、アメリカ社会の「辺境」にいるユダヤ系アメリカ人の苦境にスポットライトを当てる意図も含まれていると考えられる。

- 8) 注7を参照のこと。
- 9) 冒頭でも述べたように、幼少期からの差別体験が要因で、Salinger はユダヤ系の血統を受け継ぐことを公にしたがらなかった。ユダヤ系の特徴が強い本名の Jerome David Salinger ではなく、名前の頭文字のみを残して J. D. Salinger というペンネームで作品を発表したのも、その理由による。同様に、自らの「分身」の役割を付与した Sonny Varioni と、その兄弟の Joe Varioni についても、ユダヤ系のキャラクターとして設定し、ユダヤ系の名前をつける勇氣はとてもち合わせていなかったのであろう。モデルにしているのがユダヤ系の Gershwin 兄弟であることを曖昧にするため、同様にアメリカにおける移民であるイタリア系の Varioni というファミリー・ネームを代わりに使用していると推察される。
- 10) 長命であった作詞家の兄 Ira とは対照的に、弟で作曲家の George は脳腫瘍のため三十八歳で急逝している。“The Varioni Brothers” では作詞家の Joe が先に命を落としており、この点には Gershwin 兄弟の伝記的事実との相違が見られる。

### 参考・引用文献

- Bryan, James E. “Salinger's Seymour's Suicide.” *College English*, vol. 24, no. 3, 1962, pp. 226-29. JSTOR, Web. <[www.jstor.org/stable/373294](http://www.jstor.org/stable/373294)>
- French, Warren. *J. D. Salinger*. Revised ed. Twayne, 1976.
- Hobson, Fred and Barbara Ladd. editors. *The Oxford Handbook of the Literature of the U.S. South*. Oxford UP, 2016.
- Marovitz, Sanford E. “Introduction.” *Contemporary Jewish-American Novelists: a bio-critical sourcebook*. Shatzky, Joel and Michael Taub. editors. Greenwood Press, 1997.
- Salinger, J. D. “Blue Melody.” *Cosmopolitan*, September 1948, pp. 51, 112-119.
- . *The Catcher in the Rye*. Penguin, 1994.
- . *Franny and Zooey*. Penguin, 1994.
- . *Nine Stories*, Little, Brown & Co., 1991.
- . *Raise High the Roof Beam, Carpenters, and Seymour: An Introduction*. Penguin, 1994.
- . “The Varioni Brothers.” *Saturday Evening Post*, July 17, 1943, pp. 12-13, 76-77.
- Schleifer, Ronald. *Modernism and Popular Music*. Cambridge UP, 2011.
- Shields, David and Shane Salerno. *Salinger*. Simon & Schuster, 2013.
- Slawenski, Kenneth. *J. D. Salinger: A Life*. Random House, 2011.
- Tyson, Lois. *Critical Theory Today: A User-Friendly Guide*. 2nd ed. Routledge, 2006.
- 井出義光, 本間長世, 大橋健三郎編『アメリカの南部』研究社, 1973.
- 邦高忠二, 稲田武彦『アメリカ・ユダヤ文学を読むーディアスポラの創造力』風濤社, 2016.
- 鈴木武樹『サリンジャー作品集2 倒錯の森』東京白川書院, 1981.
- 関口功『アメリカ黒人の文学』南雲堂フェニックス, 2005.
- 高橋美穂子『J. D. サリンジャー論ー『サイン・ストーリーズ』をめぐって』桐原書店, 1994.
- 田中啓史『ミステリアス・サリンジャーー隠されたものがたり』南雲堂, 1996.
- 新田玲子『クラフツマン・サリンジャーの挑戦-サリンジャーなんかこわくない』大阪教育図書, 2004.

